

(別紙2) 審査の結果の要旨

論文題目 『近世の内水面舟運と社会構造』

氏名 永原健彦

本論文は、日本近世の関東内陸部における河川・湖沼（内水面）舟運について、主に下総や常陸の河岸を事例として取り上げ、その歴史的な性格と、基礎にある社会構造（舟運社会）、周辺社会との関係構造などについて包括的に解明しようとして試みたものである。まず序章で研究史の整理と課題設定を行い、ついで本論部分（7つの章・一つの補論）を三つの部に分けて構成する。

第一部「舟運社会の中核的存在」は、利根川中流域の二つの河岸を事例とし、舟運社会の中心を担う存在である河岸問屋や荷宿<sup>にやど</sup>の特質を検討する二つの章から構成される。1章では、下総関宿藩の城下町・関宿に包摂される境河岸を取り上げて、小松原家や青木家などの河岸問屋と、これを取り巻く多数の船持渡世の者たちとの関係構造を、18世紀の争論分析から明らかにする。また2章では、相馬郡布施河岸（田中藩・幕領<sup>こしばんやど</sup>の相給）を素材に、水戸街道脇往還と利根川舟運の交叉点としての特質を、荷宿・越番宿の性格、布施村内部や周辺の流通構造などの点から検討している。

第二部「舟運を支える社会」の三つの章では、利根川下流域の大規模な河岸を有す佐原村（下総最大の都市でもある）を取り上げて、舟運社会の形成と展開過程を多面的に考察する。3章では佐原新宿の市場の構造を上市を素材として明らかにし、市を包摂する新宿と、市を有さず「常店」<sup>つねみせ</sup>を抱える本宿との相克、また新宿内部の上宿と下宿との市場特権をめぐる争論をそれぞれ詳細に検討し、併せて市場と佐原河岸を中心とする舟運との関係にも言及する。4章は、明和・安永期の幕府の河岸吟味による河岸問屋株の設定と、佐原における特異な有り様（問屋株の村持としての特質）を明らかにする。続く5章では、佐原村の商人仲間の構成と機能を考察し、難船処理の実態や、村持の河岸問屋という性格との関連を検討する。

第三部「幕藩権力と舟運」では、藩権力と舟運社会との関係を古河藩・水戸藩領域の河岸を事例に検討する。6章は、渡良瀬川に面する城下町古河を事例とし、宿や河岸を包摂する都市社会の特質、藩の公的輸送業務による舟運社会への規定性について考察する。7章と補論では、北浦北部や那珂川流域を素材として、水戸藩の国産荷物や商人荷物の流通構造を、水戸藩領内や江戸への流通構造にも注目しながら検討を加える。

本論文は、史料を博搜し、実証的にも手堅い分析を積み重ね、新たな知見や斬新な視点を提示するなど有意義な成果を上げている。論文の構成や舟運社会の全体像の提示などの点に課題を残すが、本審査委員会は、上記のような優れた研究成果に鑑みて、本論文が博士（文学）に十分値するものとの結論を得た。